

二次元ドリームノベルズ/PDF立ち読み版



精霊騎士
アクエアル
隷属の花嫁

小説 酒井 仁

挿絵 高浜太郎

序章

第一章 反乱軍の戦乙女

第二章 黒き炎の精霊

第三章 恥辱、公開陵辱

第四章 屈辱に悶えよがる精霊騎士

第五章 白き肌を灼く淫火

006

015

046

078

136

201

登場人物紹介

Characters



アクエアル

聖なる泉より召喚された水の精霊騎士。変幻自在の武器・水竜剣と神秘の力を操り、民を脅かす国王軍に立ち向かう。

ニナ

国の危機を案じ、一族に伝わる救国の勇者・アクエアルを呼び出した娘。

トルブレヒト

国王軍を率いる将軍。主君の変貌ぶりに疑問を抱いている。

エイヴァゼイン

かつては民を思う心優しい人物だったが、突如豹変し、恐怖による圧政を強いている国王。

「ほう、ならば水の精霊よ、こいつらの罪は自分で背負うと、そう言うのだな？　ならばこ奴等には我が君への謀反の意志などないことを証明してもらわねばならぬ。つまり、大罪人である水の精霊、お前を衆目の面前で辱めることだな……」

その言葉に男たちは言葉を失った。無理もない、彼らは救国の勇者、水の精霊騎士という旗の下に結集した反乱軍なのだ。我が身かわいさに見目麗しき美貌をそう簡単に汚せるはずがない。

「そ、そんなこと」

「私なら構わない……好きにすればいい」

他ならぬ精霊の言葉に男も、親衛騎士も声を吞む。

「辱めとはつまり、さつき私の胸を弄んだようなことを言うのだろうか？　人間の男が同じ人間の女を慰撫する……あいにくだが私は水の精霊、人間の営みとは無縁の存在だ。なにをされようとどうということはない」

「お、面白い！　聞いた通りだ、貴様らを処刑するのはやめだ、その代わり存分にその女体を弄べ！　遠慮はいらぬ、ためらえば斬り捨てる!!」

売り言葉に買い言葉のつもりではなかったのだが、アクエアルの態度は親衛騎士には挑発的に映ったようだ。男たちは精霊の左右に立つと、うつむきながら胸部アーマーの内側に手を潜らせてくる。むにゅっ……もみゅっ……最初は遠慮がちに、だが次第に指に力が

こもってくる。

「す、すみません、精霊騎士様。オレらは、その脅されて」

「気にすることは、な、ない……」

それなりに後ろめたさはあるようだが、やめるつもりはないらしい。マシユマロのような乳房の柔らかさは、男たちの欲望に火を点けたのか、徐々に揉み方が荒くなっていく。

「あひやうっ？ につ、匂いを……か、嗅ぐな……ッ」

目をぎらつかせ、無心で乳を捏ね回しつつ、首筋に顔を近づけて鼻をひくつかせる。ア
クエアルの身体から立ち上る体臭を嗅いでいるのだ。

「あふ、あは、は。いっ、いい匂いだ、甘い香りだ……」

「あ、ああ……騎士様……素敵だっ」

「はひう……ひ……ンクウッ。ハア……はあ、う……」

大胆さを増した指が、布地の上から乳首を探り始める。本当なら甲冑を引きはがし、布地を引き裂いて直接揉みだきたいのだろうが、精霊が身にまとう衣服の縫製が人の力で破かれるはずもない。その代わりに指先につまみ上げた突起をコリコリと入念に捏ね上げる。さすがに痛みが走り、アクエアルは顔をしかめた。

「うっ、くはあんっ……！ はわ、ひやううウウンッ……！」

「どうしたどうした、胸以外にもまだまだ触るところはあるぞ！ そら、お前はここ、お

前はここだ」

はやし立てる親衛騎士が、空いた男の手を腹部の切れ込みと、下肢の付け根に押し当てさせる。びく、と身をこわばらせるものの、すぐに平らかな腹を撫でさすり、内股を揉み始めるのは、彼ら自身が興奮し始めているなによりの証拠。アクエアルはそんな彼らの変化にただ驚くばかりだ。

ぶ厚くてごつい男の手のひらは意外と温かい。無骨ではあるが大きくて頼もしく、華奢でぼちゃつとした二ナの手などとはまるで違う。男に素肌を撫でられているという実感が気恥ずかしくつい身をよじってしまうが、逃れようとするほどに彼らの手は執拗に柔肌の感触を楽しみ這い回る。

(人間の、お、男とは……こっ、こんなにも熱心に女の身体を愛撫するのか……?)

驚いている場合ではない、撫でさすられる部分の肌が妙に火照り始めていることに精霊は気付く。無骨でざらざらした手のひらが摩擦するためだろうか、いやその火照りは自身の身体の奥底から溢れ出てくるようだ。

「ん、ふう……っ。あ、はあ、あん……………」

「騎士様っ、あ、アクエアル様っ」

「んふうんっ、むうんっ、むちゅウウン……ッ」

むちゅううっつと右の男が唇に吸いついてくる。はふはふと犬のように荒い息を漏らし、

ふつくらと肉厚の乙女の唇を唇で挟み、れろれろとねぶる。左側の男は首筋に顔を突っ込むようにして、鎖骨の辺りに舌を這わせる。彼らの前にあるのは反乱の象徴である以前に、極上の女体。見たこともないような見事な女体を公然と弄んでいいなどと言われるのは、彼らの貧しい人生の中で最高の出来事なのだろう。

(だが……私は人間の女ではない……ないはず、なのに……っ?)

人間のするような男女の営み、女への慰撫など自分には関係ない……そんな漠然とした自信が危ういものになっている。愛撫が激しくなるにつれ、精霊騎士は不安を覚える。しかし交互に口づけをせがんでくるのを拒むわけにはいかない。

「だ、ダメだっ、これ以上は……っ」

「アクエアル様、舌出してっ」

「あふあっ……!! あむう……むふうう……ンッ」

突き出した舌をちゅるるっと強く吸われると腰の力が抜けそうになる。彼らは衆目の面前であるということも忘れ、脅されてしていることすら忘れて女体を味わうことに夢中になっている。だが世を統べる四大の精霊の一人として、人間と同じようなことをされて感じるなどということがあっていいはずがない。

「んっ! あふんっ、はあ………ンンッ!」

さわさわと撫でさすられている平らな腹がじんわり熱い。切れ込み部分から潜り込んだ



手が脇腹を何度も上下にさすり上げ、さすり下ろし、くすぐったさの中に身を委ねたくなく、下乳に近い部分を爪先でくすぐられると、そこがしつとりと汗ばんでいるのが自分でもわかる。その手が徐々に下がってゆき、くりゆくりゆと臍をくすぐったあと、ジワジワと下腹部に接近していく。

(ああ、そ、そこから下は……っ)

下穿きの内側に指の第一関節が潜り込み、しよりと「あの毛」に指先が触れると、思わずびくりと腰を震わせてしまう。だがそっちの手にはばかり注意を払っているわけにはいかない。内股を優しく揉んでいた手がいつの間にか付け根ぎりぎりのところまで這い上がってきていて、上と下から乙女の秘所を虎視眈々と狙っているのだ。

下穿きの内側になにかあるのか、彼らは知っているのだろうか。

精霊姫自身、そこにあるのがなんのための器官であるのかは知識として知っているだけだ。排泄のための二つの穴、そして人が人の子をなすために使用する三番目の穴。けれど、それは精霊であるアクエアルには無縁のもの……のはずだ。

(なら、どうして)

どうしてそこがこんなにも熱を帯びているのだろう。自分にこんな感覚は必要ない。限られた時間の中で子孫を増やさなければ生きてゆけない、人間ならではの行為など自分には不要だ。そう強く自分に言い聞かせ、肌からの情報の一切をシャットアウトしようと試

みる。

「はあ、はあ、ゆっ、勇者様っ、アクエアル様っ」

「くっ……ん、はんっ、あはうんンッ……！」

リアクションを抑えようとする努力は男たちにとつては逆効果だった。込み上げる快感を堪えるような声を漏らすほどに彼らの欲望は膨れ上がる。ちゅっばちゅっばと音を立てて鎖骨の周辺をねぶり回し、胸元が唾液でべとべとになってしまふ。

あまりの執拗さに、徐々に彼らの愛撫に疎ましさすら覚え始めてしまふ。うなじを撫で上げるぶ厚い手が気味悪い。ざらついた手のひらが、妙に汗ばんでいるのも不快だ。と、脇腹から臀部にかけての一带を撫で回す手が、やおら背後から下穿きの中に潜り込み、尻の割れ目に指先を押し込んでくる。

「ひくうっ……？」

反射的に下肢に力がこもり、きゅっ指を尻肉が挟み込む。そこで侵攻を止めるどころか、さらにもぞもぞと指先をねじ込んでくる。くすぐったさと異物感に、背筋を悪寒が走り抜ける。

「んっ！ くふっ、う、うウツ!？」

「あ、アクエアル様のお尻、締まりがいいですね。こ、この奥に、あれが……女のアレがあるんですね……」

公衆の面前にもかかわらず、いや大勢の視線に晒されているからこそ、彼はいまや邪な快楽を覚えているようだ。言葉つきからして、女性経験は豊富とは言えなさそうで、しきりに尻肉の奥に潜む女の部分が気になるようだ。そうこうする間も指先は臀部を搔き分けて、ツン、とある部分が乱暴に突かれた。

「はわひいんっっ!？」

狙い変わらず、指先は精霊の裏門に到達している。触れただけでは飽きたらず、ぐい、ぐいと指先をそこに押し込もうとしているので、騎士は銀髪を震わせて抗議の声を上げる。

「そ、そこっ、そこは……後ろの……アヒイヤウウッ……!」

「アクエアル様の、尻の穴……しり……尻の穴か……」

ためらいがちに乳房を揉んでいた彼はすっかり豹変し、嬉々として精霊姫のアヌスを颯りにかかると。女の股間が男の興味を引くということは理解できるが、排泄口に好奇心を示すのは合点がいかない。人間は誰もがそんな場所に興味を抱くのか。銀騎士の脳裏は混乱する一方だ。硬い指先が括約筋を突破して腸内に侵入しかけるたび、下腹部がぎゅーっと縮こまって腹部に痛みが走る。

「ク、ウフウッ……! ひっん、ん、ふううう……ッ」

排泄口をくじられ無骨な指が何度もねじ込まれかけても、銀髪の騎士は菌を食いしばってその屈辱に耐える。なにも感じまいと裏門から意識をそらす、額にじわりと冷や汗が

滲むのを止められない。

「どうもそれだけでは刺激が足りないようだ……アレを連れてこい」

氣丈に振る舞う精靈の様子をさも楽しんで眺めていた親衛騎士が、一人の巨漢を連行させる。後ろ手に縛られ猿轡まで噛まされたその男こそ猛将トルブレヒトであつた。

「……………！」

自分同様、いやそれ以上に屈辱的な格好を強いられているアクエアルを見て、巨漢の騎士が声なき声を漏らす。虜囚の身に墮したといえ、彼がどれほど抵抗を示したのかはすぐに見て取れる。剣も甲冑も取り上げられ、全身切り傷だらけ、それでも猛将の氣迫はいささかも衰えてはいない。

「どうだ、自分がたぶらかした男との再会は。指揮権の放棄および謀反の嫌疑で本来なら即刻処刑されるところだが、我が君エイヴァゼインの特別の計らいをもって、未だ生きながらえたあの惨めな姿を」

「……私に、なにをさせようと言うのだ」

話が早い、と親衛騎士は剣を抜く。白刃の閃きと共に騎士の下半身を包む布が無惨に引き裂かれ、男性の局部が丸出しにされてしまう。甲冑を奪われた上のこの仕打ち、かつての猛将も見ると影がない……というところだが、群集は違うどよめきに包まれた。かの猛将

の名に恥じぬお宝がそこにあったからだ。

「……………」

きゃつと叫んで目を背けたのは、王都市民のご婦人方。勃起こそしていないが、トルブレヒトの股間のイチモツはそれほど見事な大きさだった。反乱軍兵も国軍兵も、ゴクリと生唾を飲んで肩を縮こませる。そして、アクエアルはぼかんと口を開けてそこを凝視してしまう。

「あ、あれが……男の……」

「おお、ロートルにしてはいいものをお持ちで。では淫乱で破廉恥な水の精霊殿には、トルブレヒト殿のお宝を慰めてもらおうか。イヤだと言うのなら、哀れロートル騎士殿のお命はここまで」

その言葉に顔色を失ったのは、トルブレヒトだけ。猿轡を噛まされた口でウオウオウと呻くが、親衛騎士は取りあわない。自分がなにをさせられようとしているかはわからないが、局部を露出させた騎士が前に連れてこられ、両手を吊り上げていた鎖が緩められるにいたって、さすがに異様な空気を感ずる。

「な、慰めるとは一体……うっ！」

親衛隊騎士は男たちに命じて銀髪美女の上半身だけを前屈みにさせる。

尻を大きく後ろに突き出したその格好は無防備そのもの。腰からヒップ、太腿へと続く

優雅な曲線は、女体の持つ自然な美を余すところなく表現している。大人の女だけが持つことのできる成熟の美、むっちりとした適度な皮下脂肪と締まりのいい尻肉とが生み出す魅惑的な臀部に誰もが目を奪われる。

顔を上げると、銀糸のように艶やかな長髪が首筋を撫で落ちる。一瞬しかめた顔の真ん前に、トルブレヒトの股間。実際に目の当たりにした男性器は、近くで見るとますます異様な形状だ。色は肌色というよりも灰褐色に近い。太さは握って指が回りきらぬほど、長さは握って半分以上はみ出るほどか。先端部に蛇腹のように皮が重なった部分があり、先端は艶々と金属光沢を持つ別パーツのようだ。

(うっ、こ、これはなんと気味の悪い……っ)

共に戦った同士のものとはいえ、思わず顔を背けたくなるほどの不気味さ。

根元にだらりとぶら下がっている袋状のモノ。縮れた毛に包まれたさまがいかにも不潔そうな印象を受ける。そして、なにより特徴的なのは肉ホースから漂ってくる独特の臭気。甲冑と着衣の中で蒸し込んだ局部からは汗くさいような、甘酸っぱいような臭気が漂い、それを鼻面に近づけられると胸がムカムカと悪くなる。トルブレヒトの股ぐらであるということを差し引いても、心地のいいものではない。

「どうした、一度はたぶらかした男だろう。その淫らな口でしゃぶってやれ」

「なッ……!?!」

思いもかけなかつた言葉に声が裏返る。生まれて初めて味わう猛烈な羞恥心に、身が震えるのを感じずにはいられない。人間とは、なんというおぞましいことを考えるものなのか。男と女の交わりを模して、口腔に男性器を咥えさせて女を辱めるとは。

(い、いかにトルブレヒトの……戦友の身体の一部とはいえ、こ、このような不気味なものも口にするなど……考えただけで……ウッ！)

そう思つてもう一度、灰褐色の肉蛇の香りをすんと嗅いでみる。——と、股間の肉管に変化が生じる。びくっ……ただぶらりと垂れ下がっていただけのそれが自律的な動きを見せ、驚くような変化を生じさせたのだ。十分に太く長いモノだったそれに一本の芯が通つたように「ゆら……」としなり、管ではなく棒と呼ぶにふさわしい形状をなしてゆく。

みり……ミリッ……むく、むくっ……ッッ。

「もがっ、うごおおうっ、おうううっ……！」

男根の変化が生じるや、猛将はうろたえたような声を上げる。みるみるそれは生氣を得たように反り返り、隆々と天を仰ぎ見るほどの威容を表す。勃起、エレクトオンという言葉を知らずとも、これが男根の正常な反応であることはすぐにわかる。性的興奮と共に男性器はこのように硬く大きくなり、女性器の中に挿入され、性交が営まれる。

そして、いまトルブレヒトのモノがこんなになつてしまつたのは、とりもなおさずアクエアルに対する反応に他ならない。かの猛将は自分の無防備な姿に興奮したのか。ヒップ

の曲線や、乳の谷間に反応したのか。彼の視線が自分の身体のどこに注がれているのか、考えるだけで胸が高鳴ってしまう。接吻されたときも、乳首をつねられたときも、尻穴を弄られたときにも感じなかった、甘くくすぐったい情動に困惑する。

あるいは……アクエアルの美しい銀の髪や整った顔立ちか。自分自身を女としてほとんど意識してこなかった精霊にとつて、トルブレヒトの男としての反応は新鮮だった。

(トルブレヒト……わ、私を見てこのような)

不快に感じていたはずの股間の香りに頭がくらくらとする。

「どうした、さっさとそいつを啜えるんだ！」

「く……！！……………んっ」

おずおずと唇を開き、トルブレヒトの分身の先端に近づけてゆく。

唇をかぶせようとして、ためらう。何度も顔を離してはまた近づけ、何度も何度もためらう。そして――。

ぱくんっ。

誇り高き水の精霊はおずおずと口を開け、思いきって肉の棍棒を唇に啜え込んだ。生理的な嫌悪感から反射的に吐き出そうとするのを必死に堪えつつ、ほとんど真上を向いているその先端だけを口中に含む。巨大すぎるそれは金属のような光沢部分を啜えるだけで精一杯だ。しばらくもごもごしている、なんとも奇天烈な味が口中に広がる。

「んむっ……むっ、ちゅっ、ん……っはあ……ッ」

しょっぱい。苦い？ 蒸れたような、すえたような匂い。あの野性的な芳香を胸いっぱい吸い込んだアクエアは反射的に嘔吐感を覚えたが、すんでのところで踏みとどまる。それにしても男根とは、なんと奇妙な感触なのだろう。皮に包まれた表面はぶわわわしているが、内側はまるで鋼鉄が走っているような硬さ。多少の弾力はあるが、人の身体の一部があればどの変化を見せるとは思いも寄らなかつた。おそろおそろ、唇をほんの少し締めて感触を確かめる。

はむっ……むちゅる……ちゅば……じゅる……？

「んふううっ!? むふううっ」

口の中に広がる苦しょっぱい味に、思わずええぎそうになる。すぐにも吐き出したいの、肩口をがちり押しえられ吐き出せない。息苦しさと不快感でぶるぶる身を震わせながら、肉棒に舌を絡めざるを得ない。

「むうっ、くうううお、お……ッッ！」

歯を立てたわけでもないのに、巨漢の騎士が呻く。どうやら苦痛の声ではない。となるとなんなのか……れる……っ、と舌を動かしてすりこぎの表面をねぶってみる。びく、と口中で肉の棒が跳ねた。

「むぐうう、むごおおっ……!!」

「もっと吸い上げるようにするんだ、いつまで経っても終わらないぞ！」

親衛騎士に言われるままに頬をすぼめ、吐き気を堪えつつ吸引する。

頭を振り立てることに集中し、なるべく味や臭いから意識をそらすようにしていると、生理的不快感は多少とも和らぐ。口を女性器に見立てるならば、やはり擦るのがいいのだからと口をすぼめ、舌を絡め頭を軽く揺するうちに、なんとなくコツのようなものがわかつてくる。摩擦をスムーズに行うため、口中にたっぷり唾液を溜めてから肉棒を包み込むようにしてジュルジュルと吸い上げる。

(これでいいのか……人間の男女とは、みなこのようなことを……するのか……?)

じゅぷつ、じゅぷつ、れる……レルルッ……。

リズムを取って頭を振り立てていると、頭が朦朧としてくる。鼻孔を抜けるワイルドな体臭、先端から滲み出る液体の苦しよっぱい味にも少しづつ慣れてきただろうか。前屈みの体勢はつらいが、視界が武将の下腹部で隠れて、この痴態を見物している民衆の顔が見えないのは幸いだ。

これで戦友が救えるのなら……と思っていた矢先、下半身に違和感を覚えた。

「んひゃうっ!？」

男根を啜え込んだまま、おかしな声が漏れる。

ぎよっとして振り向くと、アクエアルを前屈みにさせた男たちが今度はロングドレスの

裾に手をかけ、それを大きくまくり上げている。膝まである下穿きが露わになり、それを力任せに真横にずらす。真っ白に輝く臀部、そして乙女の秘密の部分が冷たい外気に晒されてしまう。

「なっ……！」

驚きに身を起こしかけたその後頭部を、ぐいと押さえつけられた。視線を上にとやると、トルブレヒトの喉元に押しつけられた鋭い刃。剥き出しにされたヒップにぺたぺたと押しつけられているのは、汗ばんだ手のひらだろうか。

「それだけうまそうに男のモノをしゃぶってるんだ。さぞ股ぐらは大変なことになってるだろう。お前、女のアソコを触ったことがないと言ったな。遠慮することはない、恥知らずの精霊騎士殿のアソコってやつを味わわせてもらえ」

「ハッ、ハイイッ」

嬉々としてそう答えるや、ぐにゅうと尻の割れ目が大きく広げられた。冷えた明け方の外気に、思わずキュッと力が入るのを強引に押し広げられる。花の蕾のようなアヌスは白い肌比べるとわずかに色素が沈着し、呼吸をするように開いたりすぼまつたりを繰り返す。男の鼻息がふっと吹きかけられると、「きゅんっ」と怯えたように縮こまり、しばらくするとゆっくと緊張がほぐれる。

さらにその奥、アヌスより湿った色を見せる花びらは肉の襞をほんの少し覗かせ、頼り

なげに濃紅色の内容物をぬめらせる。こちらは尻穴ほど敏感には開閉せず、じつとり遠くから真珠色の体液を滲ませ、白銀のアンダーヘアをしっとり湿らせる。下腹部にいかにか力を込めようとも、大の男二人がかりではどうすることもできない。

精霊騎士はトルブレヒトのものを啜え込みながら、二つの恥ずかしい穴を衆目に晒されてしまう。

「く……み、見るな……そんなにつ、見るなっ」

「あああつ、これが女の……精霊のアソコ……！」

臀部に頬ずりをして、生温かい舌を押しつける。かと思えば淡く萌えた陰毛をクルクルと指に絡め取って、デルタ地帯をくすぐってくる。

「下の毛も銀色だ……尻の穴なのにいい香りがする……」

「ひゃひんっ！ くすぐった……よせっ、やめろっ！」

よほど女に耐性がなかったのか、あるいは自分の股間は人間の女のそれとそれほど違うのか、アクエアルにはわからない。だが何万言を費やして褒められたところで、嬉しくも何ともない。乙女の股間を寸評するその口調は、もはやアクエアルと志を同じくした者のそれではない。肉欲に狂い救国の志を忘れ果てた浅ましい男のものだ。

「な、舐めていいんですね……舐めっ、舐めます……っ！」

「あひゃ……ふひいんッ！」

ぶちゅ……っ。いわゆる大陰唇に男の唇が押し当てられたとき、えも言われぬ感覚が全身を駆けた。ぬみゅっ、にゅむっ……不気味に蠢くのは男の舌だ。アクエアルの下肢のあいだに座り込んで顔を真上に向けた男は、まるで天井から降り注ぐ甘露を飲み下す渴き人のように、がふがふと顔の下半分を擦りつけるようにそこをねぶり始める。

(あ……ああっ……！　そ、そこは……なぜ……あああっ！)

指で足の付け根付近をぐりぐり弄られたときから、予感があった。男女交合のための穴、その周辺に触れられるだけで振動が伝わり、骨盤の奥が熱くたぎるのを。それは乳首を強く捏ね回されたときの感覚によく似ているようで、全然違う。そしていま舌で直接ねぶられたことで、その違いはもはや明白だった。

乳首があくまでも皮膚表面から伝わる刺激だとすると、股間のそれは内臓感覚。身体の内側から与えられる刺激に、乙女の肉体は急速に花開こうとしている。

にゅちゅっ……ぬびゅチュルッ、チュルルッ……！

「すごい、アソコから粘っこい汁が……どんどんっ、むふっ、溢れて……っ」

「おい、こっ、交代っ、してくれ！」

場所を入れ替えた男の舌先が幾重にも折り重なった肉の襞部分をなぞるようにせわしなく動き回り、誘い水のように唾液を舌にまぶして塗り込んでくる。

「あっ、ひ、そこはっ……だめ、だ……んふぁあっ！」



「くう……くふっ、んうう……っ」

「さあ、もつと精霊騎士様にご褒美をくれてやろうじゃないか。お前たちも膀胱に溜まったものを吐き出してスッキリするといい」

最後の一滴までぶっつけた親衛隊長が席を譲ると、すぐさま他の騎士がじりつとにじり寄ってきて下腹部を突き出す。前後左右、どこを見ても陰部を露出した男たち、到底国王直属の親衛騎士の姿とも思えない振る舞いだが、水霊騎士は彼らのいきり立った男根がすべて自分のほうを向いていることに戦慄する。

「待って、やめ……うひゃうんっ」

背後から伸びた手が銀髪を掴み、銀甲冑を身につけた美貌の騎士の身体を大きく反り返らせる。髪が引きつれる痛みにも耐えかねて目を見開く。虚しく開いた口と白く整った精霊の顔めがけ、幾筋もの黄金水流が降り注ぐ。

じよわわわわわー！～っつっ！ しろろろろー！～っつっ！！

じよぼじよぼじよぼ…びしゃっ、びしゃびじゃびじゃびじゃっつっ。

「んあおおっ、きひゃああううウウッ！ けほっ、げふんっ、えふ、んむちゅっ」

塩分を含んだ小水がまともに目に当たり、開いていられない。

開いた口と鼻孔に同時に黄金雨が降り注ぎ、気管が詰まって咳き込む。

両腕を上げて避けようにも、尿の本流はあらゆる方向から押し寄せ、精霊の全身を濡ら

してゆく。むせ返るほど立ち上る塩っ辛い臭気と熱が、これがお湯ではなく小便であることをいやが上にも訴える。

「いや……やめっ、んきゅ、んぐっ！ お、おなかに……ッ」

腹部の切り込みで露出した精霊の愛らしい臍めがけて尿筋を調節する輩がいる。

「む、胸にまでッ、き、汚らしいっ、うあ、あ、熱……ッ」

軽装甲の上から覗く巨乳の谷間や鎖骨、背後からは肩胛骨を狙い撃ちにする者まで。

あるいはもつとストレートに、M字に開かれた足の付け根のその部分を尿まみれにせんとする者も多数いる。大量に浴びせられる排泄水は甲冑と肌の間にもじくじくと染み込んで、碧のロングドレスは吸い込んだ小水でずしりと重く肌に貼りつき、不快感を二倍にも三倍にもする。

にもかかわらず。

（ああああつ、力が……力が……ッッッ！）

伝説の泉の水を飲んだ騎士たちの尿にも、やはりその力は宿っている。

それを全身余すところなく浴びたアクエアルは、ぐんぐんと身体に力が漲る充実感に浸っていた。細胞の一つ一つが活性化し、悦びが手足の先まで満ちていく。

もつと力を。もつとエナジーを。もつと……小水を……。

「よし、直接飲ませてやるっ」

一人の騎士が尿まみれの銀髪を掴んで引き寄せる。ずぶりっ！唇に昂りをねじ込むと、周囲の騎士もしばし放尿を止めて見守る。

じよろろろ……しよわわわわ……っ。

「んくっ……んぐう、む、ぷはあ、う……ごきゅん……っ」

やがて細くて白い喉が上下し、ダイレクトに騎士の放水を胃に流し込んでいく。騎士の腰に腕を回してさもうまそうに飲み下すその姿に歓声が沸き起こるのを、アクエアルは耐えがたいほどの恥辱と共に聞いていた。

（違うッ、私は悦んでなどいない！私は力を取り戻したいだけ……だから敢えてこのような辱めを受けて……いるのに！）

水精霊の心と身体が乖離してゆく。

止めどなく続く放尿シャワー、直接飲尿を強制され、形のいい肉厚の唇で黄金水を受け止める。ごきゅっ、ごきゅっ、ごきゅっ、と喉を鳴らしてそれを飲み下すのを、自分でも止められない。熱い飛沫が溶岩のように喉を灼きながら胃の腑におさまってゆくことに、途方もない充実感を覚えてしまう。

「あ……んくうんっ。んちゅっ、っはあ……ん。あは……あふう……」

ガッ、と右手が胸部装甲を掴み上げる。左乳房の形にぴったりフィットしたそれをぎりぎり握り締める。



(くるし——胸、が……ッ)

バシイイッッ!!

鋭い音を立てて、チェストプレートの留め金が外れる。精霊の装具たるそれは精霊本人の意志なしには外すことも壊すこともできない。拘束から解き放たれた乳房がぶるるとこぼれ、蒼い布地にくつきりとしこった乳首が浮き上がる。苦しかった胸元が一気に楽になり、アクエアルは小水の臭い混じりの空気をむせるように吸い込んだ。

「かはっ! はっ、はあッ、ふっ、ハアアアッ……!」

もみゆっ、くにゆ、くにゆうっ!

甲冑を引きはがした右手の指が乳房に食い込む。無意識の行動に痛みと愉悅が同時に走る。尿が染み込んだ乳房が燃え上がり、それを引きちぎらばかりに揉みくちやにせずにはいられない。

「ははは、見ろあのざまを! ついに小便を食らいながら自分で乳を揉み始めたぞ! そら、お前たちもつとひっかけてやれ!」

じよぼぼぼぼっ、びしゃっ、びちゃびちゃっ……!

「ひやくっ、しっ、沁みるウウウッ……沁みちやう……ッッ」

右手で激しく乳房を揉み潰し、左手は切り込みで露出した腹部を撫で回す。平らな腹に尿を擦り込み、ドレスの内側にまで左手を差し入れてデルタ地帯を無我夢中で擦り立てる。

意識してやってるわけではない、より強い刺激を求めて勝手に動いてしまう両手を、どうしても止められない。

(まるで……まるで自分の手に嬲られているみたいッ)

「た、隊長殿おっ、自分はもう我慢できませんっ！」

「私も、ですッ、うおおおッ！」

自分たちの放尿を浴びてよがり狂い、乳房と股間をまさぐる精霊の痴態を前に、親衛騎士たちは次々と理性をかなぐり捨ててゆく。砲筒よろしく己のイチモツを掲げ、ぐいと握ったそれを上下にしごき立てる。興奮の極に達していた騎士たちが、溜まりに溜まっていた欲望を迸らせるにはそれほど時間を要しない。一人、また一人と勃起した男根の先から白濁した液体を銀髪騎士めがけて迸らせてゆく。

どびゅっ、どびゅびゅびゅっ！　びゅるるるっ！　どは、どはっ！！

「ふぁああんっ、熱いイイッ、熱くて臭イイインッ！」

量こそ小水ほどはないが、白濁汁は確実に白い肌や顔、口の中に降り注いでいく。射精を避けるどころか、自分から肉筒の前に身を投げ出して牡の毒汁を浴びにいつてしまう。そう身体が動いてしまうのだ。びしゃっ、と頬の上で弾けた濃厚な汁を手のひらで伸ばして顔全体に擦り込むと、天にも昇るような法悦感に包まれる。体液まみれの指をちゅるると啜り上げると、胸郭が締めつけられる。

「ちゆるっ……んむ、ふううんっ！　ち、からが……ちから……ッッ!!」

降り注ぐザーメンに秘められた泉の靈力は小水のそれをさらに越えている。

擦り込んだ肌はひりひり焼けるように火照り、ねぶり取った舌が麻痺するほど強烈な刺激が脳髓を掻き回す。精靈のエナジーを取り戻す悦びと、下賤な人間の体液によがり悶える屈辱との狭間で意識が朦朧としてくる。

(ダメエッ！　こ……これじゃ力が制御、で、きな、イイイッ……!!)

ごろり、仰向けに倒れ込んだ女体にさらに白濁が降り注ぐ。

ふるんっ、とたまりかねたように左胸を掴み、布地がずれる。白い肉球が勢いよくこぼれ落ちて揺れる。そこにも容赦なく降り注ぐ熱い白濁汁を、無我夢中で手のひらで擦り込まずにはいられない。

にゆるっ、にゆちっ、ぬりゆりゆんっ！

小指の先ほどにしこったニップルを指先につまみ、コリコリつねる。ザーメンのぬめりが潤滑油となつて、桃色の突起が指先で淫らな舞を舞うかのようだ。

「あふうああ、お乳……お乳がッッ！　しっ、痺れッッ」

半開きの口の中に流し込まれ、露出した左乳首に垂れ落ちると、右手が反射的にそれを塗り込んでいく。臍にこんもり溜まった白い樹液を指にまぶし、太股をもじもじ擦りあわせながら下肢の付け根に指を潜らせると、きゅんっとな肉の突起が切なく揺れる。理性とい

う操り手を失った精霊の肉体は、ただ快楽だけを求めて己が女体を責め苛む。

びしゃあつ、ぼどぼどぼどっ！　びゆるるるるるっ！！

「はあ……あふあ、んちゅっ……熱くて……臭く、て……にゆるにゆる……うっ！」
にゅぽんっ！　ぐじゅぐちゅぐちゅちゅっ！

腰を浮かせ、己の股ぐらを指で激しく掻き回す。

「ふわああひいいいっ！　にゆるにゆるルウ、奥までエエエッ……！」
ずぶぶっ。

尿と唾液と愛液と精液の混合液にまみれた指がずぼりと三本もねじり込まれ、腰がびくと宙に浮く。あっと思つた次の瞬間、アクエアルは凄まじい力で全身が掴み上げられるのを感じる。

どびゅびゅびゅっ！　びゆるるるっ、どばあああっ！

さらに降り注ぐ白い液、熱い液、臭い液。

「ふわああつ、らめええ、お、おかしくなっちゃ……っ……！！」
ずぶりっ！　ずぶぐちゅうっ。

三本の指で勢いよく密壺を掻き回す。腰が浮く。膝が揺れる。

指が完全に根本まで挿入され、その指を中で広げると、ぶちやつと肉鬣が開放された。

「ここおおっ、ここにイイッ！　中にいひいんっ……！！」

どびゆるるるる〜〜〜ツツツツツ!!

ひときわ跳んだ白濁が弧を描き、液まみれの肉芽と肉髯にもろに命中する。

「うひゃわああああ〜〜〜ンツツツ……!! ……!!」

びくん、びくんっ、びくんっ。

弓なりになった身体が頭と、爪先だけで身体を支えていた。ふらりと揺れ、雲の上を漂っていた心は真つ逆さまに闇の底に墜落する。

美貌の精霊騎士は、もはや騎士と呼ぶに値せぬ姿に成り果てた。

ぼとっ……ぼとっ、ぼたっ……。

白銀の肩当てや手甲、破損した胸当てにべっちよりこびり付いた粘液が滴り落ちる。

美しい銀の長髪を彩るティアラの羽根飾りもぼつとりと重々しく、その銀髪もガビガビにこわばるほど、大量の精液が浴びせかけられてしまった。腰のベルトや下肢を包む純白のタイツ、銀靴の拍車までどろどろで、男の汁で汚されていない部分などどこにもない。目の覚めるような鮮やかな碧のロングドレスは、白濁で白く濁った染みだらけになってしまった。

「う……くっ」

どさりと俯せに倒れ伏すと、石床に溜まった液溜まりにびちゃりと顔を突っ込んでしまふ。もはやなんの味なのかも定かではない不気味な動物臭がつんと鼻を突く。



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>